

年・頭・所・感

別世界のお話

別世界と言っても外国や地球外惑星でのことではない。王侯貴族や大富豪のことでもない。自分の身近にいて、技術士とは違った世界で働いている人たちの世界である。自分の世界以外の世界について、自分は何と無知なことか。

自分の娘の自慢話のようで恐縮だが、娘は大学在学中に社会福祉士試験に合格し、卒業してある社会福祉法人に勤務した。その法人は愛知県と東京都に拠点と呼ばれるいくつもの施設を運営し、障害者やその親に対する支援を行っている。

最初は愛知県のある拠点に配属され、そこでは主に精神障害者と知的障害者らに対する支援を行っていたが、その話は驚きの連続であった。

ある知的障害者は養鶏場で採取した卵のパック詰め作業において、6個パックには詰められるが、10個パックには詰め終わった瞬間から次々と卵を割り始めるという。自宅で母親が買うのは10個パックであり、母親がそこから卵を取り出し、割って料理するのを見ている彼にとって、10個パックの卵は割るものだという認識のようだ。

また、適当(適切)という概念が理解できない精神障害者に、鉢植えに適当に水をやってとお願いすると、床が水浸しになっても止めないという。水の量を具体的に指示する必要があるのだそうだ。

真剣に仕事と向き合っている娘の話は私にも大いに役立つことがある。私の以前の職場では、改正障害者雇用促進法の趣旨に則り、数名の知的障害者を雇用していた。しかし、そこではその障害者の行動が理解されず、回りの者はその者が我々に悪意を持って、わざとそのような行動をするのでないかと

池田 憲二 (いけだ けんじ)

技術士(建設部門)

北海道本部 副本部長



まで誤解するようになってきた。私はつてを頼って障害児教育に詳しい小学校の先生に講演を依頼した。そこで自閉症やアルツハイマー症候群について学んだ職員らは、今度はうまく障害者と付き合えるようになったという。

その後、娘は東京の拠点に異動になった。今度は医療的ケア児の面倒を見ながら、都庁や区役所の担当者らと行政の支援を巡ってやり合う毎日だという。

医療的ケア児って、ご存知でしょうか。ちょっと言葉は悪いが、進んだ現代の新生児医療は、以前なら助からなかった超未熟児や難病、障害のある子の命を助けてしまう。命さえ助けてしまえば、そこで医療(医者)の役割は終了。そこから24時間365日、これら重度心身障害児の痰の吸引や経管栄養、酸素吸入などは家族に委ねられる。これら医療的援助を必要とする子供を医療的ケア児という。

この拠点は医療ケア児を一時的に受け入れ、自由時間どころか深夜でも休む暇のない親たちを福祉の観点から支援する場所だという。努めて明るく過ごそうとしつつも、悲しい結末に遭遇することもあり、それが自分のミスに起因するものであってはいけないという緊張感に満ちた職場でもあるそうだ。娘は、今度は働きながら介護福祉士と保育士の資格を取得し、ここで真剣にか弱い命と向き合っている。

技術士法第1条(目的)の後半に「科学技術の向上と国民経済の発展に資する」という言葉がある。この部分を別な社会貢献に関する言葉に置き換えた別世界がいくつもあることだろう。私は技術士として、別世界で活躍する人たちに恥じないよう、頑張りたいと思う。